日本医史学雑誌　第66巻第4号（2020）　386–399

合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図の原典から明らかになった事

板野　俊文

香川大学

受付：平成31年2月6日／受理：令和2年10月12日

要旨：合田強は江戸中期の讃岐の医家で，和蘭大通詞の吉雄耕牛の成秀館で学んだ講義録五巻と，それをまとめた一冊の本を書き残した講義録の巻三は，解剖図や外科学の図が多く写されている．これらの原図は何によるのかを調べた．その一部はステーヴェン・ブランカールトの『改新解剖学 “De Nieuw Hervormde ANATOMIE”』とローレンツ・ハイスターのドイツ語版『外科学 „Chirurgie“』のオランダ語版であることが判明した．さらにブランカールトとハイスターの与えたその後の日本に於ける影響について考察した．

キーワード：合田強，吉雄耕牛，西洋醫述　巻三，ステーヴェン・ブランカールト，ローレンツ・ハイスター

1　はじめに

合田強[1]の『西洋醫述　巻三』[2]は，宝暦12年（1762）に大通詞の吉雄耕牛[3]とその弟蘆風[4]の成秀館で受けた講義録五巻中の第三巻である．筆者らは，『西洋醫述　巻三』[2]を翻刻し報告した．この巻には，解剖図などが写生されているが，その図は，12年後の安永3年（1774）に出版された『解體新書』とは，異なるものであった．これは，『解體新書』[5]の原本であるクルムスの „Anatomische Tabellen“[6]の和蘭翻訳本とは違う本を写したと考えられる．それでは，一体それはどのような原本であったのかという疑問が生じた．

その後，同著者の『西洋醫述　巻四』[7]の翻刻も報告したが，この著では薬草の図が写されており，これはドドエンスの『薬草誌 Cruydt-Boeck』によると思われ，同論文の序文と考察で言及した[7]．『西洋醫述　五』[8]で写されている図では，カテーテルや兎口の手術が写生されている．しかし，これら図も原典は不明であった．

この原典を明らかにする事で，当時の和蘭医学の受容が如何なるものであるかを示すことができると考え，当時の吉雄家に所蔵されていたと思われる和蘭語の原本の検索を行った．これは片桐一男がその著書の中で既に報告している[9]．その著者の20人の名前が列挙されているが，ステーヴェン・ブランカールト（本文ではブランカールとフリガナがつけられている）と，ローレンツ・ハイスター（原本ではヘーステルとフリガナがつけられている）にいきついた．さらに，インターネットでの検索により，原図を発見した．

本論文では，これらの情報について，報告すると同時に，後の日本の解剖学や外科学に両者が与えた影響について述べる．

2　登場人物の略歴

（詳細は参考文献の項を参照）

この論文にでてくる人物は必ずしも多くの人々に知られているとは，限らない．そのため略歴を作成した．これは夫々が生存，活躍した年代を知る上でも参考になると考える．ことにハイスターが生存した時代と，吉雄耕牛が生存した時代が重

なっていることを考えれば，いかに当時の和蘭医学が時間差なく日本に伝えられたかがわかる．

合田強[1)]

享保9（1723）～安永2（1773）．讃岐国豊田郡和田浜生まれ（現香川県観音寺市）．父は合田伝右衛門吉盤．弟は合田大介（蘭斉）．名は強，字は千之，通称求吾，温恭，号は巨鼈，鼈山．幼少の時，合田又玄，高橋柳哲について医を修め，宝暦2年（1752年）2月京都にて松原一閑斎に医と儒を学んだ．その後，長崎にて吉雄耕牛・吉雄蘆風に学んだ後，宝暦12年（1762）5月長崎より讃岐へ帰る途中の南肥後で永富独嘯庵・亀井南冥に出会い，2人に長崎に遊学を勧める．墓は香川県観音寺市豊浜町和田浜．

吉雄耕牛[3)]

享保9（1724）生．長崎．寛政12（1800）長崎で他界，享年77歳であった．江戸時代中期の和蘭大通詞であり，蘭方医として吉雄流外科を開祖した．名前は初め定次郎，次いで幸佐衛門，のちに幸作，幸載と称す．諱は永章，号が耕牛，養浩斎，成秀館ともいう．耕牛は長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ，少年時代から出島のオランダ商館に出入りして，寛保2年（1742）年の19歳のときに小通詞になり，寛延元年（1748）には大通詞となった．

吉雄作次郎（永純）[4)]

享保10年（1725）生まれ，安永6年（1777）に他界し，享年53歳であった．永純は江戸中期の阿蘭陀通詞で諱は永純である．阿蘭陀通詞吉雄藤三郎の子で幸左衛門（耕牛）とは1歳ちがいの弟であり，耕牛とは別家をたてた．寛保2年（1742）に稽古通詞になり，宝暦8年（1758）小通詞末席に，明和3年（1766）小通詞並に，同8年（1771）小通詞助役となった．安永6年（1777）10月4日歿している．明和8年9月に「由緒書」を提出している．子には左七郎がいる．

ステーヴェン・ブランカールト[10)]（1650～1702）

オランダ南西部にある都市ミデルブルグに文学者ニコラウス・ブランカールトの長男として生まれる．ブランカールトの著書『改新解剖学』の献辞によると，幼い時に父から文学および医学教育を受けたようである．ブランカールトはブレタで文学の勉強を終えた後，アムステルダムの薬局で薬学を修める．その後，フラーネケル大学で教授となった父に呼ばれ，その大学で医学を勉強する．医学博士号を取得した後，再びアムステルダムに戻り，開業した．

ブランカールトは数多くの著書を出版している．著作活動は解剖学・外科学・内科学・衛生学・薬学・化学・植物学・動物学・文学・哲学．辞書類等の広範囲に及ぶ．今回の論文での引用に関しては『改新解剖学』という解剖書である．『改新解剖学』のオランダ語版には3つの版がある．初版は1678年に刊行された．これを改訂・増補したものが，第二版（1688年）であるが，内容は完全に異なっている．図版も新しい図に差し替えられ，増版されている．第二版と第三版（1696年）は内容的にはほとんど変わらないが，図版はさらに改訂・増版されている．

ローレンツ・ハイスター[11)]（1683～1758）

1683年9月19日に，フランクフルト　アムマインに生まれる．ギーセン大学，ラインデン大学で，アルビヌス（父），ブールハーヴェーらについて，医学を学ぶ．スペイン継承戦争の時に軍医として従軍し，多くの経験を積む．1708年ハイデルウエイク大学を卒業後．1710年イギリスに遊学，同年アルトドルフ大学の解剖学，外科学の教授，1720年にヘルムシュテット大学の解剖学・外科学教授に招かれ，1730年には医学理論と植物学の教授に代わり，1740年には医学実地と植物学に代わった．1756年4月18日ヘルムシュタットで没した．

ハイスターには，多数の著書があるが，その中でも，よく知られているものは，次の三種である．

『大要解剖学 *Compendium Anatomicum*』がある．これは1717年ラテン語初版，英語訳（1721），フ

ランス語訳（1724），ドイツ語訳（1725），和蘭語訳（1728），スペイン語訳（1755）がある．

『外科学 Chirurgie』1719年ドイツ語初版，ラテン語訳（1739），フランス語訳（1770）が，英語訳（1743），スペイン語訳（1748–57），オランダ語訳（1741），イタリア語訳（1770）がある．オランダ語訳は1741年に初版，1755年と1776年にも刊行されている．

他に『医学の基礎 Compendium institutionum sive fundamenta medicinae』（1736），『医学の実地提要 Compendium medicinae practicae』（1743），『植物一般体系 Systema plantarum generale』（1748）などがある．

3　巻三に写生された図と原図の照合

図1～6の原典はブランカールトの『改新解剖学』第三版[12]である．

一方，以下示すのがオランダ語版（1695）の書誌である．

Blankaart S: Anatomia reformata, sive, Concinna corporis humani dissectio, ad neotericorum mentem adornata...: accedit ejusdem authoris De balsamatione nova methodus, à nemine antehac similiter descripta. Amstelodami: Apud Joannem ten Hoorn, bibliopolam, 1695.

これが，おそらく吉雄耕牛と合田強が見た原本と思われる．しかし，この版はインターネット検索で確認することが出来るが，図が不鮮明である．一方，ラテン語版[13]はより鮮明な画像でコピーができることがわかった．ラテン語第2版（1695）とオランダ語第3版（1696）は巻末に図版のリストがあり，Tabula I-LXVII まで67図版があり，共通している．さらに今回引用した両版の全ての図は共通であることの確認を行った．以上の事から本論文ではやむなくラテン語版の図を用いることとした．

図1　『改新解剖学』（ラテン語第3版）1695年発行　標題紙

Steph. Blancardi: Anatomia reformata, sive, Concinna corporis humani dissectio, ad neotericorum mentem adornata...: accedit ejusdem authoris De balsamatione nova methodus, à nemine antehac similiter descripta, 1695.

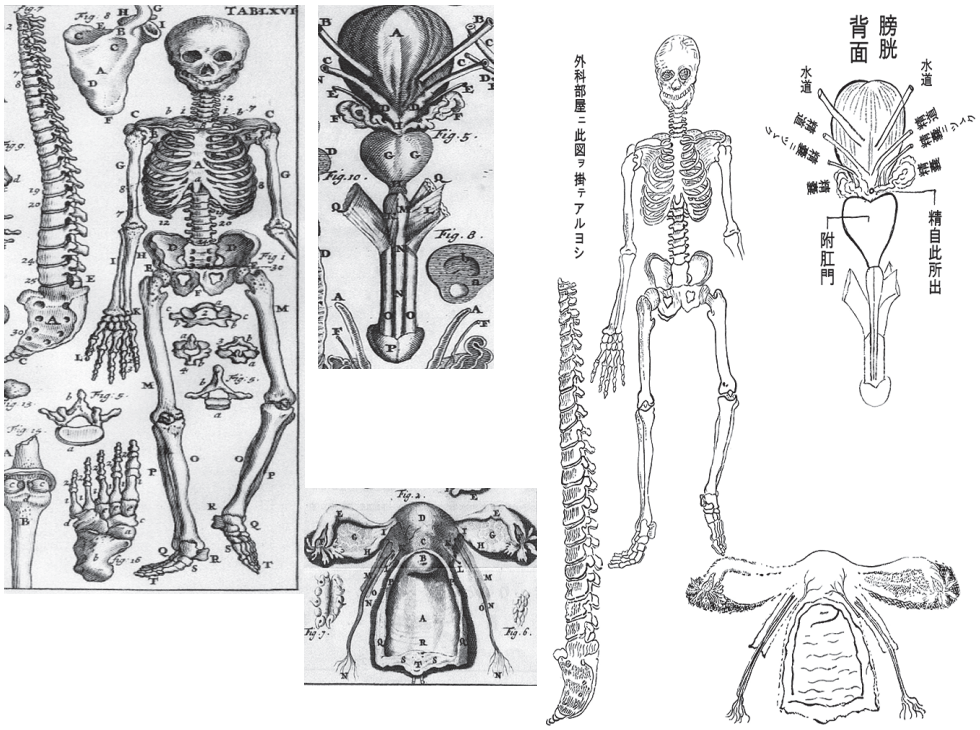


図 2　ブランカールトの『改新解剖学』（ラテン語 1695 年版）に掲載された図を左に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を右においている．

この骨格人の図（図 2. 右）を見たとき，当初はなぜ左手の肘から下がないのだろうかと疑問に思っていたが，原図を見れば，確かに切れている．さらに合田強の書き込み「外科部屋ニ此図ヲ掛ケテアルヨシ」から考えると，原本を見ながら写生したと思われる．

次に横に書かれている膀胱の図に関しては前面から書かれたものが多く，背面から書いたものは少ない．また，それぞれの管について，吉雄師に説明を受けたものを書きいれている．

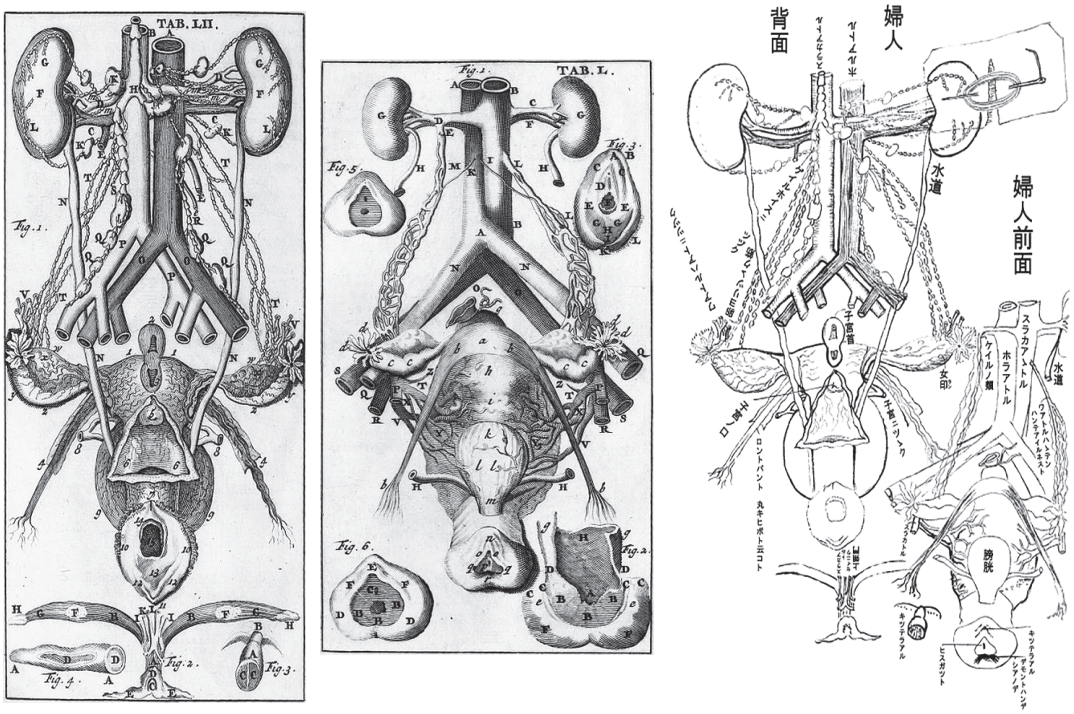


図3　ブランカールトの『改新解剖学』（ラテン語1695年版）に掲載された図を左に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を右においている．

女性器の図（図3．左）は輸卵管の伸びている角度が各解剖書によって異なるが，ほぼ水平に近い所に注目した．

婦人背面と前面の図が写されている．原図は別々に書かれているが写図は近い位置に書かれている．動静脈とその分岐部まで正確に写されている．この図を見ると，合田強の写生力の素晴らしさに驚くと同時に，必要な情報を残さず書き尽くすという強い意志を感じる．

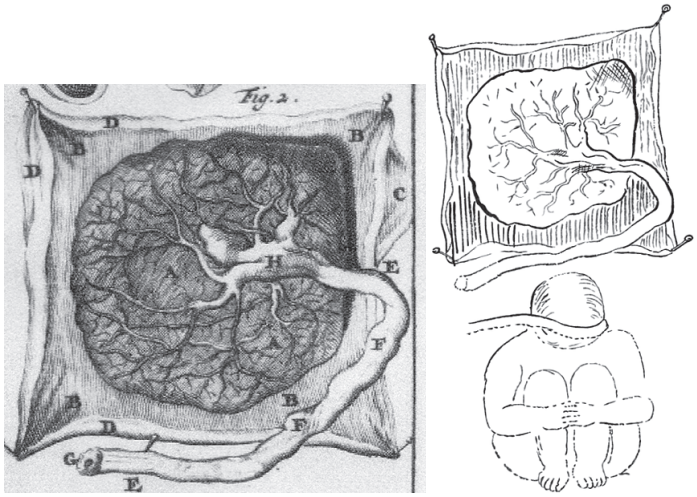


図4　ブランカールトの『改新解剖学』（ラテン語 1695 年版）に掲載された図を左に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を右においている．

胞衣の図と思われるが，右下の胎児の図は『改新解剖学』では，見つからなかった．

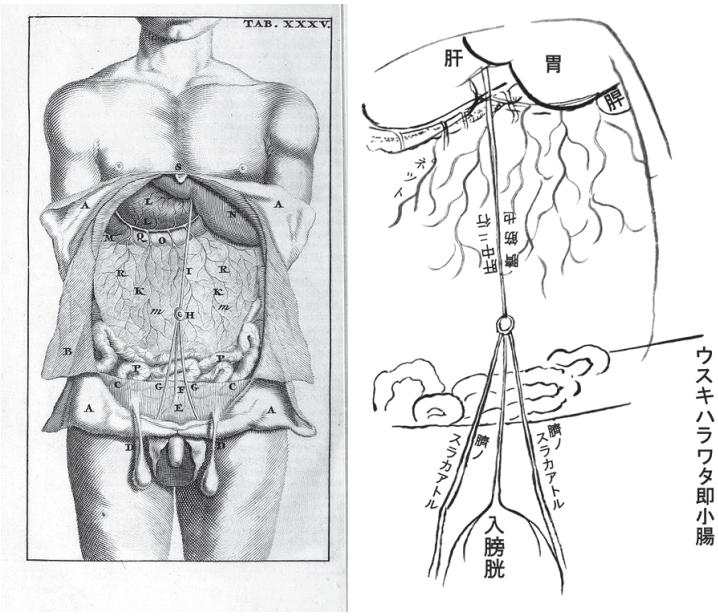


図5　ブランカールトの『改新解剖学』（ラテン語 1695 年版）に掲載された図を左に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を右に示した．

この図は当時の解剖書ではしばしば出てくるもので，合田強がどの図を参考に写したのかをと特定することは難しい．強の図には脾臓が書かれている．この点からするとブランカールトを写したとは言い難いが，ブランカールトを写した他の解剖書でもこのような図がでてくるので記載した．

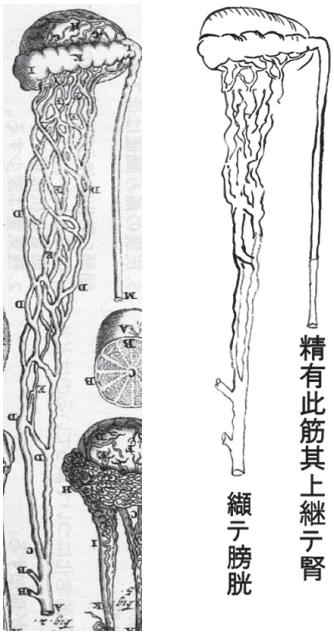
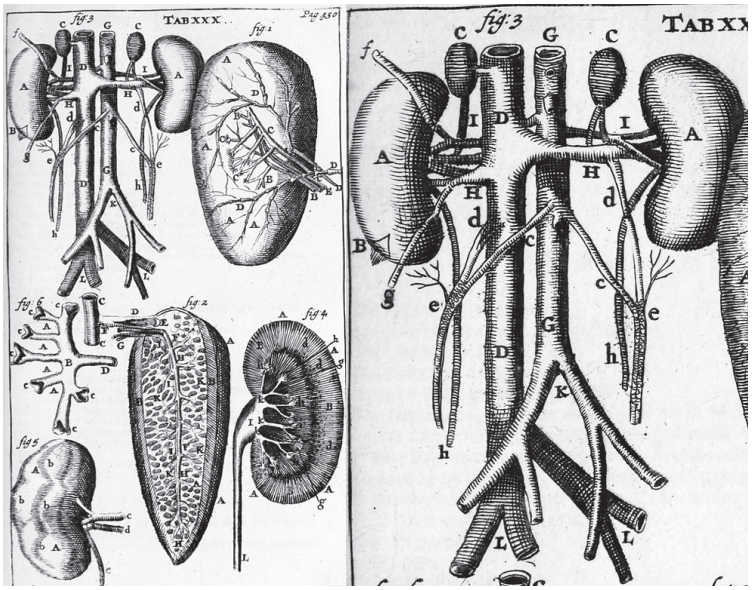


図6　ブランカールトの『改新解剖学』（ラテン語1695年版）に掲載された図を左に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を右においている．（原図の上下は逆にしている．）



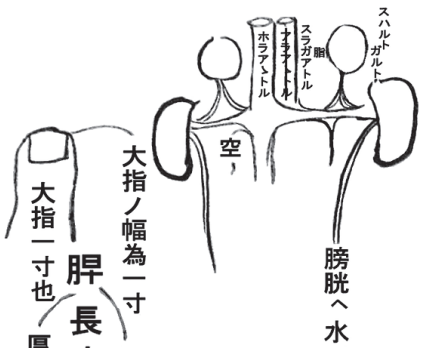


図7　ブランカールトの『改新解剖学』（オランダ語1686年版，430ページの次，Tab. XXX）に掲載された全体図を上左に，関連する部分の拡大図を上右に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を下においている．

「病理解剖（解臓）を行った」との記述の後に書かれた図の後に，説明的に書かれた図なので，翻刻した当時は，「病理解剖時に直接写生した可能性もある．」と考えたが，本図と図8はブランカールトの『改新解剖学』を写したものであろう．

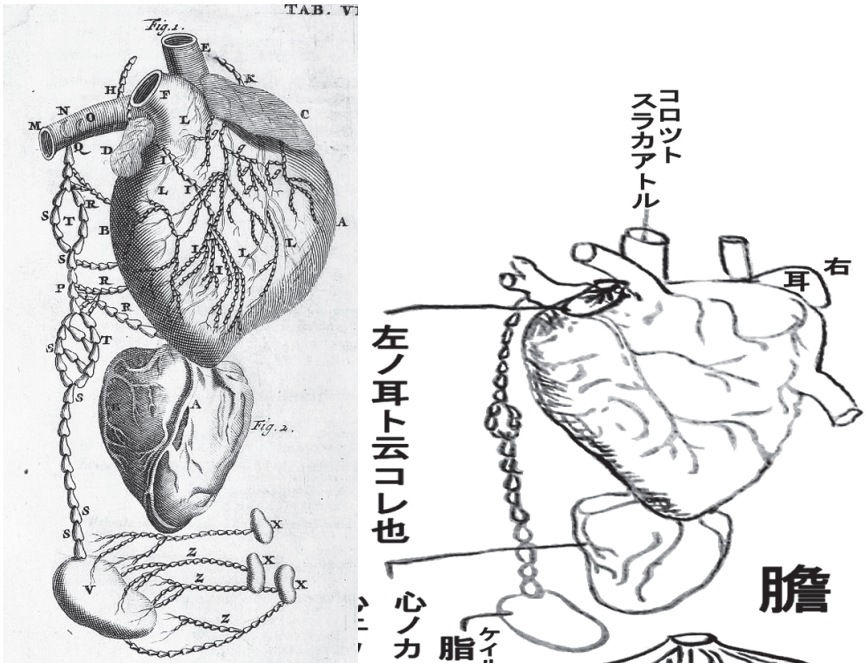


図 8　ブランカールトの『改新解剖学』（ラテン語 1695 年版）に掲載された図を左に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を右においている．

大動脈はオランダ語辞書によればaortaであるが，大をgroot，動脈をslagaderとすると「コロット スラカアトル」は，あながち間違った訳ではないかもしれない．さらに，右耳（右心耳），左の耳（左心耳）の書き込みは当時としては最先端の知識であったと思われる．

次に，別の教科書を使って講義されたものを示す．図 10～12 の原典はハイスターの『外科学』である．なお，ハイスターの外科学書のオランダ語版には，オランダ国立図書館の目録で 3 版（1741，1755，1776）が確認できる[14]．ただし，これらの図はコピーが容易でないことや，一部の図は全てが写真版となっていない．そこで本論文で引用した図は全て，オランダ語版（1741，1755）にも掲載されていることを確認した後に，原典であるドイツ語版[15] の図を使用することとした．

図 9 はその表題紙である．他の図では左を原典からの写図とし，右を巻三の写図とした．

図9　『外科学』（ドイツ語版）1743年発行　標題紙[15]

Heister L: Chirurgie, in welcher alles, was zur Wund-Artzney gehöret, nach der neusten und besten Art, gründlich abgehandelt, und in vielen Kupffer-Tafeln die neuerfundene und dienlichste Instrumente, nebst den bequemsten Handgriffen der chirurgischen Operationen und Bandagen deutlich vorgestellet warden. Nuremberg: Widow of J. Stein, 1743.

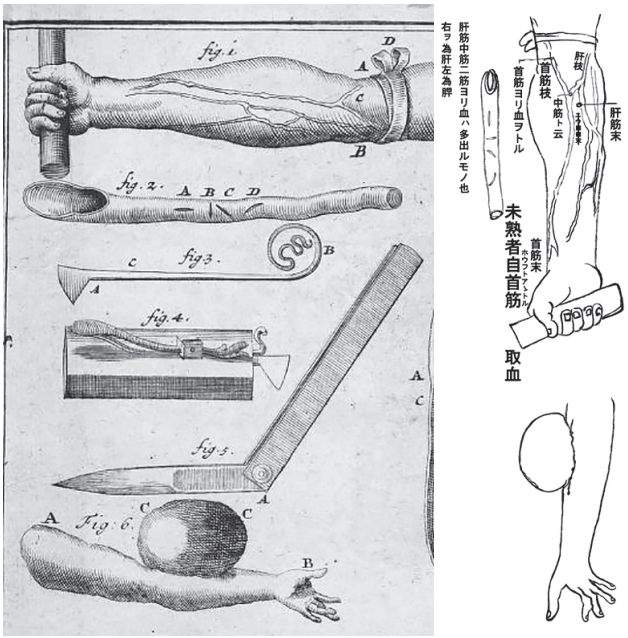


図10　ハイスターの『外科学』に掲載された図を左に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を右においている．

血管の図のみでは通常の解剖学書にも見受けられるが，瀉血で静脈に切り込みを四か所入れる図や，下の誤って大きな脹れを作っている図から，『外科学』を写したと考えた．

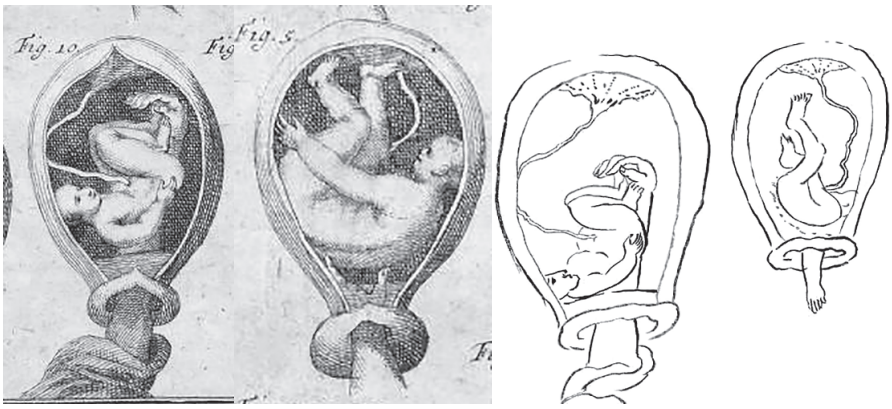


図11　ハイスターの『外科学』に掲載された図を左に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を右においている．

出産時の状況を書いた図である．ハイスターの原図ではより多くの難産の様子を書いているが，合田強の描いたものは2つだけである．両者の左の図はほぼ同一であると考えたが，右の図は，合田強の写した図では胎児の顔が書かれていないが原図を写したと考えた．

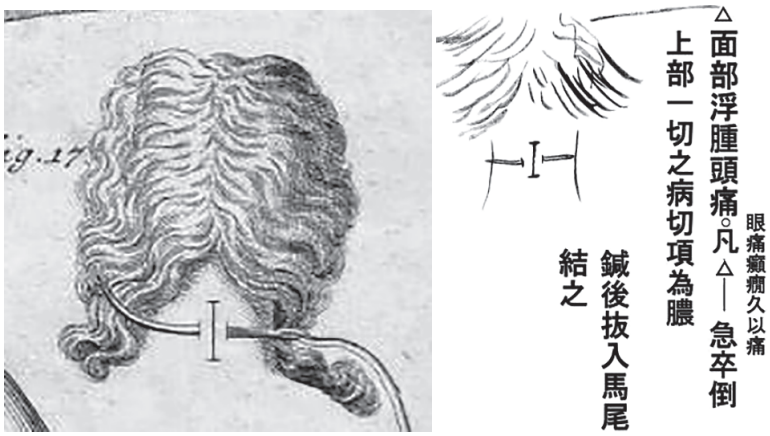


図12　ハイスターの『外科学』に掲載された図を左に，合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図を右においている．瀉血の一部にある図で髪の下の部分を示す部分より，この図を写したと判断した．

これ以外に，今回は示していないが，巻五の「カテーテル」や「兎口の手術」の図も『外科学』の中にある．また，講義録の巻一と二は主に内科に関する巻なので外科とは関係ないようであるが，刺絡（瀉血）に関する記述がある．これは『外科学』の中に刺絡篇として記載がある．

一方，既に述べたが，他のドドエンスより写した図などもある．ここに示した情報は全てではなく，他の図や他の巻に写された図にも，明らかに上の本より写したと思われる図がある．

4　ブランカールトの『改新解剖学』の内容について

ブランカールト『改新解剖学』1678年初版．京都大学附属図書館所蔵江馬本によれば，本書は五巻から成っている[10]．各巻の題目は次の通り．

第一巻　腹腔　1–142頁
第二巻　胸腔について　143–196頁
第三巻　頭腔について　197–322頁
第四巻　筋について　323–366頁
第五巻　骨，軟骨および靭帯について　367–404頁

次に，ブランカールト『改新解剖学』第二版（1686年）．京都大学附属図書館所蔵．（ ）内の数字はその章の開始頁を示す．

解剖学，その対象および分類について（1頁）
第1部　心臓，その運動および疾病について（7頁）
第2部　大動脈について（40頁）
第3部　大静脈について（48頁）
第4部　門脈について（55頁）
第5部　肺動脈および気管支の動脈について（58頁）
第6部　肺静脈について（61頁）
第7部　胎児における血管の結合について（63頁）
第8部　肺・気管支およびその属部について（71頁）
第9部　脳膜とその血管，並びに脳とその構造および脊髄について（100頁）
第10部　全身の神経について（179頁）
第11部　眼およびその構造について（219頁）
第12部　耳の構造およびその属部について（240頁）
第13部　舌およびその属部について（281頁）
第14部　口・顎・唇について（294頁）
第15部　歯茎・口蓋・口蓋垂・喉・舌骨・腺について（298頁）
第16部　鼻およびその属部について（307頁）
第17部　大網および他部における脂肪について（315頁）
第18部　食道について（324頁）
第19部　胃およびその部分について（327頁）
第20部　腸，その運動および病症について（341頁）
第21部　腸管膜および乳糜管，並びにリンパ管について（382頁）
第22部　膵臓について（391頁）
第23部　肝臓，胆嚢および胆管について（395頁）
第24部　脾臓について（409頁）
第25部　腎臓，尿道，膀胱について（413頁）
第26部　男性生殖器について（434頁）
第27部　女性生殖器について（449頁）
第28部　卵からの生殖について（476頁）
第29部　腺について（492頁）
第30部　筋とその構造について（500頁）
第31部　骨，軟骨と靱帯について（554頁）
第32部　全身の膜について（591頁）
第33部　身体の表皮，皮膚，毛髪，爪について（594頁）
死体の防腐処理に関する新論（603頁）
第三版の1696年版の章立ては1686年版の章立てと同一である．

ブランカールト『改新解剖学』の三つの版のうち1678年版は1686年版と1696年版と内容的に大きく異なる．これは防腐剤が発達していなかったため，腐敗しやすい腹部から解剖したことによると考えられる．一方，1686年版および1696年版はこのような構成をとっていない．まず，心臓及び血管から始まり，脳，神経系と続いた後は，頭部から順に下の方に下って身体各部の解説が行われ，その後，腺，筋，骨，膜，皮膚という順序で進み，最後は体表部分の解説で終わっている．これは伝統的な解剖書と完全に異なる構成である．ブランカールト『改新解剖学』1686年版の序文に次の通りに記されている．

なお，私は（私の）解剖書を他の解剖家がこれまでにしてきたのとはまったく異なる形で始めた．なぜなら，この著作全体が血液循環および脳液循環に従って作成されているからである．

つまり，血液循環と脳液（あるいは神経液）の循環を中心に据えて，それを基盤として解剖学的記述が行われている．

次に，ブランカールトが日本の医学にもたらし

た影響について述べる．ブランカールトの『改新解剖学』は江戸後期に船載されたオランダ語版解剖書の中で最も大きな影響力を及ぼした．何といっても宇田川榛齋の『医範提綱』[16]の重要な典拠である．また『解体新書』[5]，『和蘭医事問答』[17]，『重訂解体新書』[18]における生理学的記述には，ブランカールトの影響が顕著である．また，植物学では藤林泰輔（1781～1836）による訳書『蒲朗加兒都本草』などもある．

5　ハイスターの著作と日本最初の外科学翻訳本『瘍醫新書』との関連

冨士川游の『ハイスターと我邦の外科』と題する論文がある[19]．少し長いが，以下に引用する．これが正しく伝えられたその後の日本におけるハイスターの影響である．括弧は筆者の註である．

ハイスターの外科書の中にて開巻第一に挙げられたる誘導編は瘍医新書巻一乃至巻四に訳出せられて（京都大学 医学部図書館 冨士川文庫中で閲覧できる[20]），文政2年（西暦1819年）に刊行された（一説では1790年ともいわれている）．これより先，ハイスターの外科書の第三部，繃帯諸式の篇は，大槻玄沢の子，大槻玄幹，その要をとり更に図式を加えて，『外科収功』（現在インターネットで閲覧可[21]）と題して刊行した．これは文化11年（1814年）のことで，瘍医新書新書誘導篇の刊行に先立つこと5年であった．また刺絡篇に属する部は大槻の門人佐々木仲沢，増訳して『八刺精要』（現在インターネットで閲覧可[22]）と題し，文政8年（西暦1825年）にこれを刊行した．又その尻臀部手術に関する部分は大槻玄幹これを増修して『要術知新』（現在インターネットで閲覧可[23]）と題し，文政6年（1823年）にこれを刊行した．この書には浣腸（注肛導泄法），坐薬，胞消息子用法，痔瘻及び痔核の手術等につきて，図を挿みて叙述してある．

大槻玄沢が自から記するところに拠ると，（『瘍醫新書』の自序[20]）「大槻が始めてその師杉田玄白の命を承けてハイスターの外科書を翻訳することになってから，34年，大槻は長崎に至り，通詞本木蘭皐に就て和蘭の言語を学んだ時，ハイスター外科書開巻第一外科誘導篇の訳読を受け，天明6年（西暦1786年）江戸に帰ったが，官務と診治とに忙しくして旧訳を訂正するの暇に乏しく，荏苒遅滞して居ったが，門人等の慫慂により，その校正の既に成れるものより世に公にすることとし，初稿十余巻を剞劂氏に附したる」とある．これによって見るに，既刻十余巻の残余のものは遂に校正を了らず，これを刊行するに至らなかったものであろう．

又，阿知波五郎[24]によれば，他に刊行されたものとして『椄花痘篇』，『手足切断篇』，『腹肚刺穿術』，『歇乙斯的兒藥泉論』，『要術知新』，『繃帯図式』，『瘍科精選図解』，『撮要十術』等がある．残巻その他散佚した稿本を集めるならば，玄沢とその門下の人たちで全巻がほとんど訳し尽くされたと想像してよいと判断される．

これらから，1800年代の日本における外科学で最も日本に影響を与えたのは，ハイスターであることがわかる．

6　まとめと考察

おそらく日本で最初の頃にブランカールトやハイスターの教科書を入手し，目にしたのは吉雄兄弟であろう．さらに彼らはこれを訳して講義に使ったと思われる．無論，既に指摘されているが馬場貞由や本木蘭皐も日本に教科書を導入したと，思われるが，具体的に講義などに使ったという記録はない．

次に合田強の成秀館における三巻以外の講義録の内容について述べる．巻一[25]，二[26]は和蘭内治書であるが，その中にも，いくつかの図はハイスターの教科書から写されている．ことに二巻では刺絡篇，五巻では，兎唇の手術に関する部分の図が写されている．しかし，強調しておきたいことは，これ以外の図も多く写されおり，他の教科書も使われたと考えられる．これらについては稿を改めて述べる事とする．何れにしても日本で最初にハイスターの教科書を日本に導入し，広めたのは吉雄兄弟であり，それを記録したのは合田兄弟である．

謝　辞

Lorentz Heister の “Institutiones Chirurgicae” を閲覧の許可頂いた長崎大学医学部図書館に感謝いたします．写図を作成して頂いた香川大学名誉教授田中健二先生に感謝いたします．

参考文献および注

1）富士川游．『温恭合田求吾先生』中外医事新報 1936；1238: P. 1–9（原典）　復刻　富士川游著作集　第七巻　京都；思文閣出版　1980．P. 339–341

2）板野俊文，田中健二．合田強の『西洋医述　巻三』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2016；62(1): 72–92

3）片桐一男．『江戸の蘭方医学事始　阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門　耕牛』東京：丸善ライブラリー；2000．P. 231–240　この文献から吉雄耕牛の略歴をまとめた．

4）片桐一男．洋学史事典　日蘭学会編　昭和59年　東京　雄松出版

5）小川鼎三，酒井シヅ．校注『解体新書』洋学　下（日本思想大系6　東京：岩波書店；1972．P. 207–359

6）文献5　補注　P. 404ドイツ語の「Anatomische Tabellen」オランダ語「Ontleedkundige Tafelen」である．

7）板野俊文，田中健二．合田強の『西洋医述　巻四』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2017；63(1): 133–146

8）板野俊文，田中健二．合田強の『西洋医述　五』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2017；63(3): 352–360

9）文献3のP. 103–108を参考にすると，吉雄耕牛の門人で編者の百百海鵬が『因液発備』の「標語」のなかで，吉雄塾で知る事ができるオランダ語の医学書を紹介している．原文では難解な漢字表記で列記している．当時の，蘭学者間における習慣に従い，その著者名で呼んだり，署名の一部分で呼称したりしている．ここでは，片桐一男の著書に従い，読みだけを記す．

1，ホイスホウデレイキ　2，ボイセン　3，シカットカーメル　4，マトローゼン　5，レイゲルシキデ　6，バグアールト　7，ドドネウス　8，ブカン　9，ヘーステル　10，ブランカール　11，リス　12，アールドゲワッセン　13，ウルツヒング　14，タウマス　15，アポテーキ　16，ゲソンドシカアド　17，バルベツテ　18，ベルウンバトン　19，フンダメント　20，メデレイキ

このなかで，解剖学と外科学に関係すると思われる原書は，9，ヘーステルと　10，ブランカールである．

10）クレインスフレデリック，(Frederik CRYNS)．江戸時代における機械論的身体感の受容，京都，臨川書店，2006，7–26

11）ハイスターの略歴は以下の成書と参考論文19の富士川游の論文をもとに作成した．

William F. Bynum, Helen Bynum, Dictionary of Medical Biography. Greenwood Press, Boston, MA, 2006

Editor Gillispie, Charles Coulston. Dictionary of Scientific Biography. Charles Scribner’s Sons, NY 1980

12）Blankaart, S: De nieuw hervormde anatomie, ofte, Ontleding des menschen lighaams: [Internet], Amsterdam: Jan ten Hoorn; 1696 [cited 2020 May 1]. Available from: https://books.google.co.jp/books?vid=KBNL:UBA000125778

13）Blankaart, S: Anatomia reformata, sive, Concinna corporis humani dissectio: ad neotericorum mentem adornata. Editio novissima plurimis recens inventis, tabulisque novis emendatior ac locupletior: accedit ejusdem authoris De balsamatione nova methodus, a nemine antehac similiter descripta. Lugduni Batavorum: Apud Jordanum Luchtmans, [Internet], Cornelium Boutestein, 1695. [cited 2020 May 1]. Available from: https://books.google.co.jp/books?id=DjEoWdLx0kIC

14）Heister, L: Heelkundige onderwyzingen, waar in alles wat ter heling en genezing der uiterlyke gebreken behoort, benevens de maniere van verbinden, gevonden word, zynde te gelyk met een goed getal werktuigen, tot de heelkonst dienende, voorzien. Amsterdam: Janssoons van Waesberge, 1741

Heister, L: Heelkundige onderwyzingen, waar in alles wat ter heling en genezing der uiterlyke gebreken behoort, benevens de maniere van verbinden, gevonden word, zynde te gelyk met een goed getal werktuigen, tot de heelkonst dienende. Amsterdam, Gerrit de Groot [etc.] 1755. [Internet], Amsterdam, [cited 2020 May 1]. Available from: https://books.google.co.jp/books?id=kyhlAAAAcAAJ

15）Heister, L.: Chirurgie, in welcher alles, was zur Wund-Artzney gehöret, nach der neuesten und besten Art, gründlich abgehandelt, und in vielen Kuppffer-Tafeln die neu-erfundene und dienlichste Instrumente, nebst den bequemsten Handgriffen der chirurgischen Operationen und Bandagen deutlich vorgestellet werden. [Internet], Nurembeg, 1743. [cited 2020 May 1]. Available from: https://archive.org/details/b30504375

16）医範提綱．巻之1-3／宇田川榛斎 訳述；諏訪俊 筆記　文化2年（1805）早稲田大学図書館蔵　請求番号や09-00701

最初の巻のアドレスを示す．以下同様 https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ya09/ya09_00701（2020年6月30日閲覧）

17）和蘭医事問答．巻之上，下／建部清庵 問；杉田鵡斎 答；杉田勤［編］　寛政7年（1805）早稲田大学図書館蔵　請求番号 ヤ 09-00957　https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ya09/ya09_00957（2020年6月30日閲覧）

18）重訂解体新書．巻之2-10／郁航宕覃 鳩盧模斯 撰；杉田玄白 翻訳；大槻玄沢 重訂　刊行文政9年（1826年）早稲田大学図書館蔵　キーワード　古典籍／洋学文庫／洋学（蘭学）／大槻玄沢　https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08_a0028（2020年6月30日閲覧）
19）富士川游．『ハイスターと我邦の外科』富士川游著作集　8，京都：思文閣出版；1981．P. 507–511
20）瘍醫新書（独）ラウレンス・ヘイステル著・杉田玄伯・大槻磐水（茂質）重訳　文政8年（1825）京都大学附属図書館『富士川文庫』 請求記号 ヨ/14 https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00005542（2020年6月30日閲覧）
21）外科収功　巻之上，下／平楨玄幹［著］ 大槻 磐里，鏑木 雲潭　文化10年跋（1813）早稲田大学図書館蔵　請求番号ヤ09　01101　https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ya09/ya09_01101（2020年6月30日閲覧）
22）増訳八刺精要3巻（独）ヘイステル著・大槻玄沢（茂質）訳・佐佐木知芳増訳・鳥田通奐参校　文政5年（1822）京都大学附属図書館『富士川文庫』請求記号 ヨ/16　https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00003900（2020年6月30日閲覧）
23）要術知新3巻（独）ラウレンス・ヘイステル著・大槻玄幹（磐里）訳　文政7年（1824）京都大学附属図書館『富士川文庫』 請求記号ヨ/67　https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00005594（2020年6月30日閲覧）
24）阿知波五郎．近代日本の医学―西欧医学受容の軌跡 京都　思文閣出版．1982．P. 67–77
25）板野俊文，田中健二．合田強の『紅毛醫述　巻一』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2017；63(4)：514–528
26）板野俊文，田中健二．合田強の『紅毛醫言　巻二』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2018；64(1)：86–104

What Was Clarified from the Original Source of the Figures Written in the Notebook “Seiyo Ijyutsu Volume 3” Written by Tsuyoshi Goda

Toshifumi ITANO

Kagawa University

Tsuyoshi Goda was a medical doctor in the middle Edo period, and he wrote notebooks that summarized the lecture records studied by Kogyu Yoshio at Seishukan. Several figures of volume 3 were anatomical charts and surgical figures. I examined the origin of these original figures. Parts of them turned out to be Steven Blankaart’s “De Nieuw Hervormde ANTOMIE” and Lorentz Heister’s „Chirurgie“. I also examined the influence of Blankaart’s and Heister’s subsequent impact in Japan.

Key words: Tsuyoshi Goda, Kogyu Yoshio, Seiyo Ijyutsu Volume 3, Steven Blankaart, Lorentz Heister